熊野道子著『生きがい形成の心理学』

風間書房　2012 年 2 月

生きがいは、日本人の幸福を目指す上で必須である、日本人の伝統的な考え方を含む日本独特の概念です。本書は、その生きがいに注目して筆者が行ってきた研究の成果を紹介しました。生きがい形成は、社会的には重要だとされながらも、実証的な心理学研究は非常に少なく、ましてやそれだけを扱った図書は殆ど見受けられません。しかし、それは生きがいが心理学的に扱う価値がないからではなく、生きがいには様々な要素が複雑に絡み合っているので、実証的な心理学研究として切り込むことが難しかったためと考えられます。

筆者は、生きがい形成のプロセスに着目し、生きがい形成において時間と状況の 2 つの重要な側面があることを見出し、その 2 側面から研究をすすめ、時間と状況の 2 次元からなる生きがい形成モデルを構築するに至りました。本書では、生きがい形成に関する実証的な心理学知見を幅広く取り上げて論じ、それらを基に生きがい形成モデルを提案し、本モデルを構築するに至った心理学理論を説明しています。

本書は 3 部から構成され、第 1 部「序論」では、生きがいや幸福に関する研究動向を概観し、生きがいには重要な 2 側面（時間と状況）があることを解説し、この視点から生きがいや幸福に関する先行研究をレビューしています。これまで着目されていなかった側面からの分析研究であり、新たな視点を与えると考えます。第 2 部「実証的研究」では、大学生から高齢者までを対象として行った研究成果に基づき、生涯発達における生きがいの基本構造とその変化を示し、生きがいの 2 側面（時間と状況）について紹介しています。先行研究には生きがいの定義や生きがい対象など思弁的研究や実態研究に関するものが多かったのですが、本書では筆者が行ってきた実証的研究をまとめており、生きがい形成の実証的心理学研究を行うための基盤を提供しています。第 3 部「結論」では、生きがい形成モデルを提案し、本モデルを構築し

た理論とその特色を説明しています。

本書を刊行後、明るい長寿社会づくりに向けて、高齢者の生きがいと健康づくりの活動を支援する『一般財団法人長寿社会開発センター』から生きがい形成モデルを紹介する研究論文の執筆依頼がありました。そこで、生きがい感を高く感じている高齢者の事例に本モデルを適用して考察し、本モデルを活用した高齢者の生きがい形成支援について検討しました。その結果、生きがい形成モデルは高齢者の生きがい形成支援に活用できることが明らかとなり、その成果をまとめて「高齢者の生きがい－時間と状況の 2 次元からみた生きがい形成の価値過程モデルからの考察－」『生きがい研究』（第 21 号，pp.4-19, 2015 年）を執筆しました。

生きがい形成は、心理学の分野のみならず、教育学や福祉学の分野でも重要な課題です。本書が、高齢者の生きがい形成への活用のみならず、幼児教育・学校教育・特別支援教育において、生きがい形成を実践するための一助になれば幸いです。

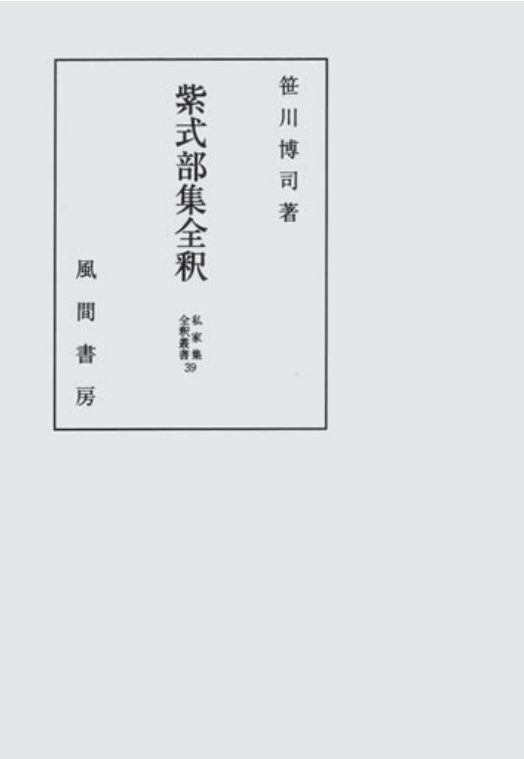
注）日本老年行動科学会からの依頼により、本書の「著者による本の紹介」を以下の学会誌に執筆しており、これに加筆・修正を行いました。

熊野道子（2012）．著者による本の紹介――熊野道子著「生きがい形成の心理学」――高齢者のケアと行動科学，17, 77.

笹川博司著『紫式部集全釈』

風間書房　2014 年 6 月

『紫式部集』との出会い



2008 年初夏、京都地名研究会常任理事の先輩、久保田孝夫氏から重厚な一冊が贈られてきた。著書を出版すると、同じ研究分野の先輩や友人に献本するのが国文学界の慣例で、久保田氏は、私を友人の一人として認め、著書を贈ってくれたのであった。

久保田孝夫・廣田收・横井孝編著『紫式部集大成』（2008 年 5 月・笠間書院）だった。実践女子大学本「むらさき式部集」、瑞光寺本「むらさき式部集」、陽明文庫本「紫式部集」の影印が収められ、研究年表も網羅されていて有難かった。影印を眺めながら、一度機会を見つけて、古本系最善本とされる陽明文庫本と、定家本系最善本とされる実践女子大学本とを、比較しつつ丁寧に読んでみたいと思った。

翌年、2009 年 10 月 3 日 4 日、関西大学千里山キャンパスにおいて中古文学会秋季大会が開かれた。その一日目に行われたシンポジウムのテーマが「『紫式部集』研究の現在」だった。山本淳子氏（京都学園大学）が「『紫式部集』冒頭歌が示すもの」、徳原茂実氏（武庫川女子大学）が「『紫式部集』自撰説の見直し」、横井孝氏（実践女子大学）が「形態と伝流から『紫式部集』を見る」、工藤重矩氏（福岡教育大学）が「紫式部集解釈の難しさ」と題して基調報告を行い、その報告を受けて廣田收氏（同志社大学）がテーマを掘り下げるべく司会者として討論をリードした。シンポジウムの記録は、「中古文学」第 85 号（2010 年 6 月）に詳しい。会場から陽明文庫長名和修氏のご教示もあり、『紫式部集』に焦点を当てた画期的なシンポジウムになった。『紫式部集』は、それまで部分的に読みかじっていたに過ぎなかったが、このシンポジウムを契機に、私なりに正面から向き合ってみようかという思いを強くした。

紫式部越前下向追跡

さらにその一年後、2010 年 10 月 2 日 3 日、中古文学会秋季大会が立命館大学衣笠キャンパ

スで開催された。一日目のシンポジウムのテーマは「平安文学と地理」。そのテーマに合わせ、京都女子大学の加納重文先生が実地踏査を企画された。前日の10月1日から一泊二日で「紫式部越前下向峠越え」に挑戦してみようというものだった。具体的には、敦賀駅に集合し、マイクロバスで踏査地点まで送迎してもらいながら、塩津湾・深坂峠・木芽峠・湯尾峠・山中峠・たこの呼び坂を巡ろうという計画である。参加者は23名。塩津湾に立ち寄って深坂峠・木芽峠を歩くだけで一日目は暮れ、湯尾峠はバスの中からの解説となった。夜は「しきぶ温泉湯楽里」で疲れを癒やし、二日目は山中峠・たこの呼び坂を散策し、敦賀駅で解散。三々五々、午後からのシンポジウムに間に合うよう、JR湖西線の電車に乗り込んだ。

京都へ向かう車中、琵琶湖の湖面を眺めながら、加納先生と色々な話をした。話が『紫式部集』に及ぶと、「これまで積み上げられてきた紫式部集研究史のエッセンスとなるような文章を選んで紹介し、それらを順番に読んでいくことで自然と紫式部集の内容が浮かび上がってくるような書物を作ろうかと思っている。本のタイトルはもう決めている。『紫式部集総釈』。いいと思わない？」と仰った。加納先生は、『紫式部集』や『紫式部日記』にも並々ならぬ深い共感をお持ちであった。私は「是非、完成させてください。楽しみにしています」と申し上げた。

思わぬ展開

しかし、その後、加納先生から、残された人生の時間を公家日記解読にかけることにしたと、ご連絡を頂戴した。この分野において加納先生には、既に『明月片雲無し　公家日記の世界』（2002年・風間書房）という優れたご業績がある。その総仕上げとして、大原の山里に籠もって『訳注藤原定家日記』全15巻（望稜舎）の完結をめざし、定家および定家の生きた時代と対話する日々を過ごされるという。

その結果、『紫式部集総釈』のために準備された大量の複写資料を私がお預かりし、『紫式部集』の注釈作業に利用させていただくこととなった。幻になってしまうかもしれない『紫式部集総釈』の構想を本注釈に少しでも生かすべく努めたが、私の力不足でお預かりした資料が十分に生かし切れていない。

注釈書出版

こうした不知不識の縁や先学の導きによって、次のような『紫式部集』に関する拙稿を公刊することができた。

「紫式部集注釈（一）」大阪大谷国文41号・2011年3月

「鄙なる世界－『紫式部集』二〇～二八番歌と『源氏物語』－」森一郎・岩佐美代子・坂本共展編『源氏物語の展望』第9輯（2011年4月・三弥井書店）所収

「紫式部集注釈（二）」大阪大谷国文42号・2012年3月

「紫式部集注釈（三）」大阪大谷国文 43 号・2013 年 3 月
「紫式部集注釈（四）」大阪大谷国文 44 号・2014 年 3 月

これらを一冊にまとめるにあたり、紫式部と紫式部集についての解説を書き下ろし、諸先生から頂戴した様々なご教示を踏まえて必要な補訂を加えた。『惟成弁集全釈』（2003 年 4 月）『高光集と多武峯少将物語』（2006 年 11 月）『為信集と源氏物語』（2010 年 5 月）に続き、風間書房に出版をお願いした。

拙著としては別に、和泉書院から上梓した論文集『深山の思想－平安和歌論考－』（1998 年 4 月）『隠遁の憧憬－平安文学論考－』（2004 年 1 月）がある。隠遁思想と文学世界の関わりを追究したものだが、著書にまとめた惟成弁も高光も為信も、すべて私家集を残して出家した平安貴族である。『源氏物語』を読むと、紫式部も、出家願望を心に秘めながら世俗を眺めていたとおぼしい。

現在、『紫式部集』に続き、『紫式部日記』の解読作業を始めている（大阪大谷国文 45 号・46 号）。

恩師逝去

本書の初校が届いて間もない 2014 年 3 月 9 日、恩師森一郎先生が急逝された。1929 年のお生まれで、85 歳。私の母と同い年だった。大阪教育大学大学院でお世話になって以来、長くご厚情を賜ってきた。毎月、研究会でご一緒し、お元気なお姿に近くで接していただけに、森先生の訃報は、すぐには信じ難いものだった。

その前年の 10 月 18 日には、滋賀大学名誉教授山本利達先生が永眠された。1927 年のお生まれで、86 歳。私の父と同い年だった。拙稿を毎回丁寧に読んで下さり、貴重なご指摘を頂戴してきた。その二ヶ月前の 8 月、山本先生から、御論所載の「滋賀大国文」を頂戴したばかりだった。

突如、父母のような存在を亡くした私は、本書出版の準備をしながら、その春、鶯の声を「法華経」と聞きなし、しばし呆然とするしかなかった。

出版後の一報

本書を出版した年の 11 月 22 日、胆管癌が見つかったという加納先生からの一報が入った。すぐに大津日赤にお見舞いに伺った。最初の違和感は、全身の痒みだった。痒みに我慢できず、救急医療機関を受診した。痒み止めの薬を処方されたが、痒みが治まらないので、あらためて別な病院を受診した。医師から、黄疸が出ているので総合病院で診てもらう方がよい、と言われ、大津日赤を紹介された。検査を受けると、胆管癌が見つかった。癌で胆管が詰まって胆汁が流れず、胆汁が漏れていることが痒みの原因だったとわかった。現在、簡単なバイパス管を入れて痒みが出ないようにし、手術を待っている。手術は予定が立て込んでいて、年明け

の 1 月 29 日になる、とのことだった。

私は、膵臓癌で亡くなった父のことを思い出した。正月家族が集まった時、父の顔に黄疸が出ていることに皆が気がついた。それが闘病のスタートだった。

加納先生は、手術までに一時退院できるので、その機会に必要な人に挨拶状を書くつもりだ、と言われ、先日一報をもらった時の話を繰り返された。守山のマンションに置いてあるパソコンの USB 4、5 本にデータが残っているので、万一のことがあった場合、見てほしい。村井康彦先生から依頼されたミネルヴァ書房の九条兼実の評伝は是非とも完成させなければならない。そのために、もう一つ確認したい史料がある。『訳注藤原定家日記』も途中で残念だ。兼実の『玉葉』も 5 分の 4 ほど訳を終えている。

自分の研究の総仕上げと考えていた仕事が完成させられそうにない、と先生は悔しがられた。東大の五味文彦先生、京大の元木泰雄氏の文章などを読むと自信を失う、やはり歴史学者が書くものと、国文学者が書くものとの違いを感じる、と言われた。先生の関心は、歴史という通時と、地理という共時の交差点に生きる人間なのだ、と私はあらためて思った。その後、先生は、京都女子大学時代の同僚で、はじめ一般教養で哲学を教え、その後史学科へ配属された山田という先生が癌で亡くなった話をされた。二人はカープファンということで仲が良かったらしい。加納先生が病床の山田氏を見舞ったとき、余命いくばくもない山田氏が「加納さん、カープが優勝したら二人で優勝パレードをしような」と語った言葉が忘れられない、どうでもよいことだけど…と言って涙を拭われた。

近況

それから 1 年近く経った 2015 年 11 月 3 日、加納先生から電話を頂戴した。大津日赤から守山成人病センターに転院し、抗癌治療を止め、食事療法だけにしたら、体調が安定した。癌を攻撃するのではなく、共存している感じだという。電話の声も元気そうだった。ミネルヴァの評伝も書き上げ、そろそろ初校のゲラが届く段取りになっている。定家日記は中断し、兼実の日記『玉葉』の抄出したものをまとめる仕事に入っている、とのことである。

私の家庭では、2014 年 8 月 7 日義父が逝き、既に父と義母は故人で、私たち夫婦が見送るべき者は母一人となった。その母も、大腸憩室穿孔による急性腹膜炎で大腸の一部を切除してストマ生活となり、すっかり気弱になってしまった。

諸行無常――残る時間をどう生きるか。この問いを繰り返し反芻しながら、私は二上山・葛城山・金剛山と続く山並みを眺めている。

長瀬美子・小谷卓也・田中伸編著
『幼児教育学実践ハンドブック』

風間書房　2013 年 2 月

小　谷　卓　也

[1] 本書の概要

幼児教育学実践ハンドブックは、大学学部生から幼児教育に携わる保育者まで幼児教育を学ぼうとしている方々に最適な内容の本であると自負しています。本書は 5 つの章から構成されており、各章の概要は以下の通りです。

第 1 章　幼児教育学の理念：幼児教育学の重要性・独自性、課題の概要について記載

第 2 章　幼児教育学の史的展開：国内外の幼児教育学史の概観について記載

第 3 章　幼児教育学におけるカリキュラム編成原理：幼稚園・保育所におけるカリキュラムとその類型について記載

第 4 章　幼児教育学の現状と論争点：カリキュラム論を踏まえた幼児教育の目標設定及び評価の問題について記載

第 5 章　発展型幼児教育学の試み：自然の事物・現象と関わる遊び（かがく遊び）を通じた幼児なりの思考力・判断力・表現力の育成ための新たなプログラムとしての「かがく」の理論と保育の組み立ての実際について記載

第 6 章　幼児教育学の展望：前半ではイタリア・ニュージーランド・スウェーデン・オランダ・アメリカなど国レベルで幼児教育の政策を進めている事例を紹介し、後半では次世代の保育者を育成するシステムについて記載

第 1～第 4 章までは、幼児教育を学び始める際に知っておくと良い基本的な知識について書

かれています。また第 5 章では「心情」・「意欲」・「態度」を重視してきた幼児教育実践ではあまり開発が進んでこなかった自然の事物・現象と関わる遊び（かがく遊び）のうち、特に「もの」や「こと」と関わる遊びの理論と実践の方法について概観しています。最後に第 6 章前半では、幼児教育の先進的実践を国レベルで行っている事例を紹介しながら我が国の今後の幼児教育の方向性を探っています。また後半では、保育の質を左右する保育者養成についても触れています。

[2] 本書の特徴・見所

この本の特徴は、本書 1 冊（150 ページ程度）を読めば、国内外の歴史的経緯も踏まえた幼児教育の概要を理解でき、さらに我が国の幼児教育で「早期教育批判」からあまり開発が進んでこなかった知的な保育の新しい試みとして開発した「かがく遊び」プログラム「かがく」の理論と保育の実際の組み立て方についての概要を知ることができます。

[3] こんな人にお薦め

本書は、はじめて幼児教育を学ぼうとする人、かつて大学等で幼児教育について学んだが、再び学び直したい人、さらに既存の幼児教育の枠を超え、幼児期の教育と小学校教育とのつながりを考えた主に生活科等の教科学習での体験活動を模索している人にとっても最適な本です。是非一度、本書を手にとってもらい、幼児教育について理解を深めていただくとともに、研究や実践の役に立てていただければ幸いに思います。

長瀬美子・田中伸・峯恭子編
『幼児教育におけるカリキュラム･デザインの理論と方法』

風間書房　2014 年 4 月

（共著者：落合利佳　小谷卓也　地下まゆみ　墨村充子　冨永美香　村田透　横浜勇樹）

峯　　恭　子

はじめに

本書は、2013 年出版の『幼児教育学実践ハンドブック』の続編にあたります。『幼児教育学実践ハンドブック』は、幼児教育学の基本的な理念や歴史、カリキュラムの編成原理、さらに幼児教育学における現状と論争点について紹介し、発展的幼児教育学の試みとしてカリキュラム開発の新たな視点を提案しました。このような内容を発展させ、本書ではより具体的な幼児教育におけるカリキュラム・デザインについての提言を行っています。前書の理論を多くの実践例とともに紹介し、カリキュラム論の視点からそれらの理論を具体化することによって、理論と実践を繋ぐ役割を担っています。

1. 本書の概要

本書は、幼児教育におけるカリキュラムの現状をふまえて、幼児教育におけるカリキュラムの設計方法や指針、評価の枠組みを示しています。さらに、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の 5 領域ごとに、カリキュラム・デザインの方法と評価の方法、そして年間の指導計画といくつかの事例を紹介しています。もちろん、日々行われる保育は各領域が独立しているわけではなく、5 領域を横断するかたちで行われていますが、本書では主となる領域を設定することによって、それぞれの領域に基づいて他領域へ広がりをもつ様々な保育計画が提案されています。本書を通して、自らの保育を客観的に捉え、さらなる発展・改善へ繋げていくヒントとなってくれると嬉しく思います。

2. 幼児教育におけるカリキュラム

みなさんは、幼稚園や保育園での保育にどのようなイメージをもっていますか？「毎日制作をしたり、歌を歌ったり楽しそう」、「外でたくさん遊んでいる」等、子どもたちが一生懸命遊んでいる姿が目に浮かぶのではないでしょうか。この“一生懸命遊ぶ”、“遊び込む”ことが幼児教育ではとても重要なポイントになります。わが国の幼児教育は、“遊びを通した学び”や“環境を通した保育”を特徴としていますが、まさに、子どもたちは遊びのなかで様々なことを学び、気付き、大きく成長していきます。

では、たくさん“遊ぶ”こと“体験する”ことが大切なのであれば、幼児教育においてカリキュラムはどのような役割をもつのでしょうか。カリキュラムというと、型にはめ込まれたイメージがあるかもしれませんが、そうではありません。カリキュラムは常に可変的なもので、目の前の子どもたちの姿に応じて常に変化していくものです。子どもたちにこのように育ってほしいという保育者の願いがあり、それを形にしたものがカリキュラムとなっていくのです。一方、“遊び”という側面が強い日々の保育では、子どもの「楽しさ」や「おもしろさ」を重視するが故に、「どのような活動を展開していくのか」という、保育の活動内容と方法に関心が向きやすくなってしまうことも、幼児教育におけるカリキュラムの特徴といえます。

3. これからの幼児教育におけるカリキュラムとは

幼児教育界は今、様々な変化をむかえています。制度が変わり、社会の在り方もめまぐるしく変化しています。そのような今だからこそ、新たな視点から保育を捉え、さらに幼児教育を発展させることができる力が必要になっています。それは、活動内容や保育の方法だけを重視したカリキュラムではなく、「目標論に基づいたカリキュラム設計」だといえます。

子どもたちの姿をみて「生き生きしていた」「楽しそうにしていた」と捉えることも大切ですが、それだけでは、個々のイメージに左右され主観的な見方しか出来なくなってしまいます。そこで本書では、これまで幼稚園や保育園で行われてきた保育を、子どもたちの到達すべき目標の視点から捉え直し、再構築することを目的としました。つまり、「目標論に基づいたカリキュラム設計」を行うことによって、情緒的・印象的な表現で表されていた子どもの状況を、より客観的な視点で再構築したのです。本書では、領域ごとに目標の系統性をもたせたカリキュラム計画や事例を紹介しています。「目標論に基づいたカリキュラム」が、より良い保育計画や実践に繋げていくための見取り図として機能し実践されていくことが、これからの幼児教育に求められるカリキュラムの在り方といえるでしょう。

おわりに

本書の〈おわりに〉でもふれていますが、本書の大きな特徴は、幼児教育の総合性に配慮しながら、各領域で形成する力を明らかにしていることです。冒頭で述べた通り、日々の保育は5つの領域が複雑に絡み合っています。だからこそ、本書では各領域の独自性や特性を整理し直すことによって、それぞれの独自性を活かした年間の計画を作成することを企図しています。

幼児教育は小学校以降の学びとは大きく異なります。それは、それぞれがもっている独自の目的があるからです。子どもたちは日々色々なことを感じ、気付き、考え、経験しています。そのなかで多くのことを学び、私たちが想像する以上の成長、発達をしています。本書が、手にしてくださった方々の保育観や実践の新たな気付き、そしてヒントとなり、これからの未来を生きる子どもたちがもつ大きな可能性を開花することができるお手伝いとなることを願っています。